



国立病院機構
南九州病院

地域がん診療病院
日本医療機能評価機構認定病院

南九

MINAMI KYUSYU HOSPITAL

だより

2022 冬号
VOL.34

院是『病む人に学ぶ』

患者さんとともに、安全で良質な、
理想の医療の実現を目指します。

国立病院機構理念

国民一人ひとりの健康と、我が国の医療
の向上のために、たゆまぬ意識改革を行
い、健全な経営の元に患者の目線に立っ
て懇切丁寧に医療を提供し、質の高い臨
床研究、教育研修の推進に努めます。



独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization

CONTENTS

年頭所感 1～3

NANKYU TOPIC 1

■ CT装置増設について 4

NANKYU TOPIC 2

■ 診察室増設、入退院支援センター
移転のお知らせ 4

NANKYU COLUMN

■ 停電作業の実施について 5

■ 消防訓練の実施について 5

■ 新年の抱負 5

人事異動

地域医療連携室だより Vol.55／編集後記

年 頭 所 感

南九州病院がさらに大きく飛躍する年になります



院長
久保田 伊知郎

皆さん、明けましておめでとうございます。本年もよろしく御
願い致します。

2020年1月、国内初の新型コロナウイルス感染症患者が報
告されてから、約2年が経過しました。このパンデミックで全世
界の多くの人々が亡くなり、また、政治的、経済的、文化的など
の大きな問題を突きつけられました。これは感染症対策の問題
ではありますが、この規模、この強さの感染症は、医療だけでは全く
解決出来ないことを嫌と言うほど思い知らされました。しかし、このようなパン
デミックを人類は過去に何度も経験し、乗り越えて来た歴史があります。1918年のスペイン風邪（イン
フルエンザ）では、世界で5億人もの人々が感染し（当時の世界人口の25%以上）、5千万人～1億人近い
人々が死亡したと言われています。この当時のアメリカの状況を研究した「Public health intervention
and epidemic intensity during the 1918 influenza pandemic」という論文を最近読みました。ホワイ
トハウスのRichard J Hatchett、Carter E Mecherらにより2007年5月、米国科学アカデミー紀要に発表
されたものです。この論文で初めて「Social distancing（ソーシャルディスタンス）」という言葉が使用さ
れたようです。Carter E Mecherらは、当時の新聞記録、公衆衛生報告書、自治体の記録などを詳細に調
べ、流行の初期段階で、感染世帯の自主的な検疫、公開集会の禁止や、学校、教会、劇場などの閉鎖を含
む複数の介入を施行した都市では、ピーク死亡率の低下が認められたことを示しました。早期介入を施
行した、セントルイスの1週間当たりのピーク死亡率：31人／10万人、介入が遅れたフィラデルフィアの
1週間当たりのピーク死亡率：257人／10万人でした。もしかすると、この論文の内容を聞いて小池都知
事は、「ソーシャルディスタンス」と何度も言っていたのでしょうか。ちなみにCarter E Mecherは、医療の
世界で初めて「インシデントレポート」を提唱した先生だそうです。新型コロナウイルス感染症に関して
は、国内のワクチン接種も進み、抗体カクテル療法などの治療も可能となりました。経済、政治、文化な
どを考慮すると、隔離によるウイルスの封じ込めではなく、検査や治療・ワクチン体制を十分整備し、世
界中で情報、機材や人材などを共有し、助け合いながらwith コロナで進んでいくべきでしょう。厳しい状
況は続いています、少しずつ希望の光が見えて来ているように思います。南
九州病院としても、令和3年度は設立50周年の記念すべき年ですし、今年度は
常勤医師が5名増員となり、医業収支・経常収支共に黒字になりそうです。今後
はポストコロナを考えながら、私たちは前に進んでいくべきでしょう。ポストコ
ロナの行方を決めるのはウイルスではなく、それを決めるのは、私たち人間であるこ
とを忘れてはいけません。令和4年は、南九州病院がさらに大きく飛躍する年にな
ります。皆さんの御協力をよろしく御願い致します。



実りある未来にすべく新たな第一歩を踏み出します

新年あけましておめでとうございます。皆さまには健やかに新年をお迎えのこと心よりお慶び申し上げます。

南九州病院は古くから呼吸器疾患医療、結核医療、小児慢性疾患、およびいわゆるセーフティネット系医療である重症心身障害、神経難病を中心として地域の中核病院としての役割を担って参りました。現在は、加えて緩和医療も診療の一つの柱になり、令和2年度より循環器内科、本年度より消化器内科も外来および入院診療が可能となりました。今後も診療部を充実させるべく努力していきたくと考えています。

さて、現在の世情を振り返りますと新型コロナウイルス感染症に関して触れざるを得ません。令和2年より世の中は大きく変化いたしました。コロナ禍による自粛生活を余儀なくされ、マスクは必需品となり、旅行はもとより、外食もままならない状況となりました。入院患者さんには家族の面会も許されず辛い入院生活を強いることとなりました。その中で職員一同、一丸となって困難に立ち向かっています。患者受け入れはもとよりワクチンに関しましても始良市の要請により病院内に集団接種の会場を設け病院

を挙げて協力しています。これは国立病院機構の施設でも非常に稀であると聞いています。また感染対策に関して、院内のみならず周囲の施設への教育、研修を行ってきました。コロナ禍の終焉はまだまだ見えませんが、南九州病院が貢献できることを精一杯行っていこうと考えます。

当院は今年度が創設50年にあたります。50周年記念誌では南九州病院が過去になってきた医療、そして現在、未来の当院が担うべき医療について検討、記述いたしました。51年目にあたる今年、実りある未来にすべく新たな第一歩を踏み出します。職員一同、精一杯、精進、努力してまいりたいと思います。

最後に、皆さまにとりまして幸多い年になりますよう祈念しまして年頭のご挨拶といたします。どうぞ今年もあたたいかいご支援とご助言を承りますよう心よりお願い申し上げます。



副院長
園田 至人

期待を超える南九州病院に！

令和4年、あけましておめでとうございます。

昨年はやはり新型コロナに翻弄された1年であったと思います。始良地区でもクラスターが発生し、日々感染者数が増減するニュースに一喜一憂しておりました。そのなかで私たちの南九州病院は、地域住民へのワクチン接種、感染者の受け入れがはじまり、PCRなどの検査体制も充実するなど、地域における中核・専門医療機関として大きな使命を果たせたものと思います。これは職員のみなさんがそれぞれの役割を担ってくれたからに相違ありません。

私自身は4月に南九州病院に赴任して、当初道に迷う日々がつつきましたが、多くの方々にいろいろなことを教えていただきながら、ようやくこの病院のこと、始良地域のことが少しずつですが見えてきたように思います。そしてこの病院、始良地域がどんどん好きになっていくように感じています。

南九州病院は50周年の節目を迎えました。つぎの50年に向けて新しい一歩を踏み出す時です。この1年、地域住民の皆さん、地域の医療機関から「期待される病院」でありたい。そして、その「期待に応える病院」、さらに「期待を超える病院」になっていけるようにと思っています。

そのために私が考えているのが「南九版はたらきかた改

革」です。通常のいわゆる「働き方改革」は時間外労働や過重労働の解消を目指すものととらえられます。もちろんそれは大事なのですが、「南九版はたらきかた改革」は、職員ひとりひとりが「病院がよりよくなるためにはどうすればいいか」を考えながらはたらくというものです。

私自身、日々の診療をこなすことに忙殺されがちですが、なんとかより良い病院になるためにはどうすればいいか考えながら行動していくつもりです。皆さんも日々の仕事を昨日よりも今日、改善できるように頑張る中で、「こうすればもっとよくなるのに」とか、「ここを変えればもっとうまくいく」ということを常に考えながら仕事をしてもらえればとおもいます。そして、私はそのみなさんが考えたことが実現できる仕組みをつくっていきたくと考えています。ひとりひとりが考え、成長し、そして貪欲に挑戦していくことが、「期待を超える南九州病院づくり」の原動力になっていくものと信じます。さあ、みなさん、何からはじめましょうか。

みなさんにとって素晴らしい幸せな1年になりますように。



統括診療部長
東元 一晃

所 感

虎のごとく前向きにチャレンジしていく年に

新年 明けましておめでとうございます。

昨年は、丁度2年前に発生した新型コロナウイルス感染症に苦しめられた年でしたが、オミクロン株の感染拡大や第6波の懸念もある中、秋から冬の時期になり漸く落ち着きを見せてきました。やはりワクチン接種の効果は絶大だったと改めて感じるところです。皆様も、久しぶりに心穏やかな正月をお迎えのことと思います。

さて、当院は、この2年間、コロナ陽性患者さんの受入れや、延べ約1万人の地域住民へのコロナワクチン個別接種対応、医療逼迫地域医療機関への職員の派遣等、大きく貢献してまいりました。そのおかげもあり、空床補填やワクチン接種、医療機器整備等の補助金が得られ、病院の収支は著しく改善しました。これもひとえに職員の皆様のご尽力のおかげであると心から感謝申し上げます。

今年は、NHO病院にとっても、当院にとっても将来を左右

する極めて大切な年であります。また、寅年の今年は、虎のごとく前向きにチャレンジしていく年でもあります。医業収支や病床稼働率でしっかり結果を出していく必要があります。職員の皆様、気持ちを新たに一緒に頑張ってまいりましょう。

とは言え、私も38年前に国立病院に採用になって最後の新年となつてしまいました。ゴールテープはすぐ目の前ですが、最後まで力を抜かず駆け抜けて行きたいと思いますので、何卒、職員の皆様のお力添えをお願いいたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。



事務部長
村上 司

皆様にとって、幸多きよき一年になりますよう願っております

新年あけましておめでとうございます。

2021年は、1年延期になった東京2020オリンピック・パラリンピックの感動の渦の中、変異した新型コロナウイルスが猛威を振るい第5波の大きな波が日本列島をのみこんでしまいました。先の見えない不安な日々、様々な制限が強られる苦しい日々もありましたが、職員も一丸となって乗り越えてきました。さらに2021年は、南九州病院は記念すべき50周年を迎え、職員みんなで記念誌を作りあげ、50年の足跡を振り返るとともに、将来の南九州病院の姿を想像しながら未来への希望も記し、次の50年先を目指して歴史の1ページを綴り出しました。

さて、2022年を迎え看護部は、「看護師特定行為研修」の指定研修機関となるための準備を始めました。2023年度の研修開始に向けてチームで力を合わせて準備を進めています。当院には気管切開やろう孔経管栄養の患者さ

んが多く、特定行為研修を修了した看護師は、大活躍をしています。医師のタスクシフトだけではなく、看護の質を向上させ患者さんへ安心安全の提供と、ジェネラリストとして看護実践能力の向上に挑戦し続ける看護師の育成のためにも、特定行為看護師の輩出・育成を今後も進めていきます。

患者さんやご家族、地域の皆様に信頼され、安心して日々の生活をその人がその人らしく送ることができる、一層努力してまいります。

皆様にとって、幸多きよき一年になりますよう願っております。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



看護部長
三島 潤子

CT装置増設について



2021年11月より80列マルチスライスCT装置「Aquilion PRIME SP」(キャノンメディカルシステムズ社)を導入致しました。従来使用していましたCT装置と比較すると、管球1回転での撮影範囲が広くなり、短い息止め時間で広範囲の撮影で

きるため、患者負担の軽減が可能となりました。昨今厳しく言われております医療被ばくに関しましては、最新の画像処理技術(逐次近似法やAI技術)が搭載されており、従来装置



放射線科
井上 丈聡

より少ないX線量で撮影ができ、最大50%ほどの被ばく低減が可能となっております。さらに画質も向上されており、短時間で広範囲の撮影を低線量高画質で検査が出来るようになりました。また、今までは義歯や人工関節等からのノイズ(金属アーチファクト)により、周囲の臓器が観察しにくい画像でしたが、金属アーチファクトを低減する機能が搭載されており、金属周囲臓器の観察もしやすい画像を提供することが可能となりました。心臓CTに関しましては、心臓に特化したソフトも搭載されており、従来と比べ心拍変動に柔軟な対応が可能となり

精度の高い解析、3D画像の提供が可能となりました。

今回増設しましたCT装置は、様々な最新の技術が導入されております。これらの技術を十分に活用し、より一層「患者さんに優しい医療提供」に向けて取り組んでまいります。

NANKYU TOPIC 2

診察室増設、入退院支援センター移転のお知らせ



スムーズな外来診療を行い、診察待ち時間の短縮を図ることを目的に外来診察室2室を増設いたしました。新しい診察室1室には陰圧装置を設置することで、院内感染対策の一翼が担えると考えています。



また外来診察室増設に伴い、入退院支援センターの場所を医事課待合室前に移設しました。正面玄関入口から近くわかりやすい場所になったことで入院予定患者さんの利便性にも配慮しています。



外来看護師長
前田 康恵

人事異動

採用・転入

発令日	氏名	所属・職名	異動事由
R3.11.1付	戸田 逸朗	神戸医療センターより臨床研修医 11月1ヶ月のみ	採用
	圖師 もも	外来 非常勤看護助手	採用
R3.12.1付	小西池 佑一	神戸医療センターより臨床研修医 12月1ヶ月のみ	採用

退職・転出

発令日	氏名	所属・職名	異動事由
R3.11.1付	篠崎 睦美	企画課 経営企画係	転出 (別府医療センター)
R3.11.30付	前園 泰生	管理課 非常勤システムエンジニア	退職
R3.12.31付	柴田 晋	6病棟 療養介助専門員	退職

停電作業の実施について



令和3年11月3日水曜日(祝日)に、電気設備点検に伴う停電作業を行いました。院内の保安系統全域が点検範囲となり

ました。事前に医療安全管理係長、電気士、業務班長で全職場を回り、問題点等の聞き取りを行うとともに、会議や院内LAN等で周知を行いました。当日はいくつかの想定外のトラブルが発生しましたが、各職場で事前に入念に準備をいただいていたため、大

きな問題とはなら

ずに、予定通りの時刻に作業が終了しました。関係職員の皆様に感謝申し上げます。停電作業は法令により定めた保安規程により、毎年行う必要があります。今回の反省点は、次に活かすために検討していきたいと思います。



業務班長
鎌原 健志



消防訓練の実施について



消防法で定められた消防訓練を行いました。昨年度は、コロナ禍という事もあり、座学での研修と、通報訓練を行いましたので、久しぶりのリアルな消防訓練でした。14時、院内の

火災発生の発報と同時に訓練は予定通り開始しました。当院では、初めての病棟から直接、消防署へ病棟看護師長が、しっかりと口調での通報を行いました。通報からまもなく、消火器を持った多くの職員が駆けつけ鎮火させ、患者搬送へと着々と進みました。患者搬送は、シートで搬送したのですが、シート生地の高さと一丸となった職員の団結力も感じられたところ。今回は日勤帯での通報、消火、避難訓練のほか、

新人職員の消火器訓練を実施、12人の初々しい職員が水消火器を持って『火事だ…』と大声を叫び、訓練もしました。さて、ここからが本題です、降下訓練。出火想定場所は3階にある9病棟。病棟内の壁面に直下型の降下装置があります。窓を開けると、桜島からの風も強く、下を見下ろすと意外と高かったです。降下器具を開封し、ダ



ラッとまっすぐに垂れた白い筒が病棟から飛び出し、そこに脚を入れ落下(降下)しました。入る瞬間は、恐怖感ありありでしたが、いざ降下するとクルクル回りながら降りていく感じで、安堵しました。数人が降下訓練を実施し、消防訓練は無事終了となりました。



庶務班長
谷口 秀二郎

新年の抱負

皆さん、あけましておめでとうございます。昨年は新型コロナウイルスの影響で、通常業務に加え、大きく変化のある年であったように思います。とはいえ、令和三年の干支である丑(うし)は、先を急がず一歩一歩着実に物事を進めることが大切な年とも言われます。去年の子年にまいた種が芽を出し成長する時期、そして結果につながる道をコツコツ積み上げていく時期とされています。ですので、今年は昨年の新型コロナウイルスでの変化を醸成し新たに、将来をみすえて着実に日々の業務を積み重ねていこうと思います。皆さんも一緒に頑張りましょう。よろしくお願いします。



手術室看護師長
堀 大洋

私ごとですが、今年は2回目の年女になります。社会人2年目でもあるので、これまで以上に何事にも積極的にトライしていきたいと思います。大きく飛躍する年にできるよう、自分らしく精進して参ります。



企画課 契約係
岩奥 礼奈

昨年は沢山の方々に助けて頂きました。自分が出来る仕事も増えていき、やりがいを感じる機会も多くありました。今年はさらにスキルアップし、患者さんを笑顔にできる食事提供を心掛けていきたいです。



栄養管理室
岩下 このみ



地域医療連携室だより

地域医療連携室では医療機関訪問を実施しています。訪問の際には、東元一晃統括診療部長に同行させていただいています。今回は訪問の際に当院の診療機能について説明させていただいている当院の呼吸器科の診療機能についてどのように説明しているかをご紹介します。

呼吸器科が担当する主な疾患とその診療は？

●呼吸器感染症

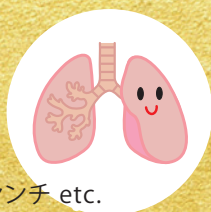
肺炎・肺結核・非結核性抗酸菌症

●肺腫瘍

肺癌・胸膜中皮腫

→ 精査：気管支鏡検査、CT、MRI、シンチ etc.

→ 治療：外科手術、化学療法、
放射線療法、緩和治療



●びまん性肺疾患

間質性肺炎・過敏性肺炎・膠原病関連間質性肺炎

●アレルギー性肺疾患

アレルギー性気管支肺アスペルギルス症・EGPA

→ 呼吸機能検査、FeNO、アレルギー検査

●閉塞性肺疾患

気管支喘息・COPD

呼吸器科がおこなう主な検査や治療は？

●CT ●MRI

●シンチグラム（骨シンチ、ガリウムシンチ、肺血流シンチなど）

●気管支鏡検査

→ TBB、TBLB

→ 超音波内視鏡を用いたリンパ節生検（EBUS-TBNA）

→ LC-SCRUM（国立がんセンター）遺伝子変異探索

●CTガイド下肺生検

●肺癌診療

→ 放射線照射（根治放射線化学療法）（緩和照射）



南九州病院は地域がん診療病院として、診断から緩和までの診療機能を有しており、手術（呼吸器外科）、化学療法（呼吸器内科）、放射線治療（放射線科）を集学的にできる体制となっています。引き続き、患者さんのご紹介をいただきますようお願いいたします。

編集後記

私は、11月から新たな部署で日々勉強しながら、業務に励んでいます。わからないことばかりですが、何事にもチャレンジする気持ちを忘れずに、今後も頑張っていきたいと思っています。



南九だより

2022冬号 Vol.34 2022年1月 発行

発行：独立行政法人 国立病院機構 南九州病院 地域医療連携室 編集発行人：園田 至人
〒899-5293 鹿児島県姶良市加治木町木田1882 TEL: 0995-63-0843・FAX: 0995-63-0840
ホームページ <https://minamikyusyu.hosp.go.jp/>